

## 総合学習の実践例

### 外国との比較の視点を取り入れた地域学習

静岡県沼津市立原小学校教諭

14年1次隊 現職参加 ホンジュラス国派遣 生田 佳澄

#### 1 はじめに

国際理解教育を総合学習のテーマにしていなければ、国際理解に関わることを扱うことはできないと考えがちではないだろうか。

本報告書の目的は、総合学習の本来の意味合いを鑑み、切り込み口が何であれ、児童の学習が進む先に今日的な課題である観点に行き着くことを示すこと、帰国隊員のもつ海外での経験・体験を教育現場でどう生かしたかを示すことの2点である。

#### 2 実践

本年度、本校の5年生が総合学習のテーマとして取り上げたのは、地域学習であった。「私たちのふるさと 原 のよさをみつけよう」を合言葉に自然・歴史に関わることを1学期に身近にいる専門家から話を聞き語り合う機会を設けた。5月、帰国隊員から第2のふるさととなった任地HONDURASでの生活一般に関わる話と現地の小学校の同級生が描いた絵の交換を行った。絵の交換については、HONDURASの児童にとっても一生記念に残るものとして感動を与えた。帰国隊員と現役の隊員との連携のもと現地での受け渡し時デジカメに収めてもらい本校の児童に自分の絵をうれしそうにもって写っている姿をまのあたりにして絵の交換の実感がもてたと児童が口々に語っていた。

5月から11月にかけて帰国隊員だからこそもっている映像等の資料を学年掲示板に適時貼る等、学習環境作りをした。また、児童の関心の高まる時期に学年の意向を受け、帰国隊員がもつ人脈の活用を図り児童の学習効果を高めた。

6月は、地域の自然に詳しい本校教頭からふるさとに残存する希少な植物・生物に関わる話を聞き語り合う会を設けた。

7月は、地域の史跡に詳しいPTA会長からふるさとの歴史に関わる話や、穴場スポットの情報を得た。

夏休みの期間、児童は、各々の関心の下、実際に地域をまわり様々な体験活動をした。例えば、土器を掘ったり、つばめのねぐら入りの観察に行ったり、川の水質検査をしたり、史跡めぐりをしたり、ふるさと 原 の素敵な風景を写真に撮ったり等多岐にわたる活動が見られた。

9月から10月にかけて児童は、活動をふりかえり各自まとめを行った。

10月末に、来日中のHONDURAS人を招き、互いのふるさとのよさを語り合う機

会を設けた。そこで、児童は、普段なら見過ごしがちなふるさとのよさを再確認できた。例えば、おいしい水が普通に飲める喜びを感じたり、希少な生物が残存する地域の誇りを感じたり、地域に伝わる伝統芸能に思いを寄せたり等、児童の感性を揺さぶる交流の時間となった。

ここでの帰国隊員の役割は、主として通訳である。HONDURAS人の理解、児童のレイネスの理解の双方がもてる存在だけに、単なる通訳にとどまることない互いの意思疎通に欠かせない配慮が必要となる。

11月、パピリオン形式による発表会をした。児童にとって、互いの視点に気付く機会となった。

12月、1月、2月の3ヶ月間を使い、児童は、伝え合う手段の実現の段階に入った。ここで、大方パンフレットの形を用いて各自が知り得たふるさと原の情報を発信する。中には、ふるさと原ならではの情景を撮ったデジタル映像をもとにカレンダーを制作する児童もいた。また、原に住む日本人以外の方々にも紹介する目的で、主要な単語を英語についてはALTに質問をして書き込んだり、スペイン語については帰国隊員に質問したりする姿が見られた。

3月、各自制作したパンフレット・カレンダーを人通りのある原駅構内・地区センターに置かせていただき、児童の学習を地域に還元する。また、HONDURASのパンフレンドに伝えたい児童については、帰国隊員を通して現地に送付する。現地では、学校長を窓口全校児童への紹介後、対象児童へ贈与される。

### 3 成果

本実践における成果は、以下の2点である。

児童に多視点を与え、学習効果を高めた。

伝える手段としての言語学習をより実践的に捉えることができた。

### 4 今後の課題

帰国隊員と現地との連携。

今回のケースは、個人レベルでの交渉が良好であったため支障なく実践できたが、帰国隊員誰もがができるためのバックアップ体制が組織だっているのであれば、今後日本の現場のニーズに沿った還元の可能性が高まると思われる。